九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「資本論」の沙翁引用 ： 商品は貨幣を恋い慕う

福留, 久大
九州大学 ： 名誉教授

https://doi.org/10.15017/1903810

出版情報：經濟學研究. 84 (4), pp.77-88, 2017-12-20. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

（研究ノート）

『資本論』の沙翁引用

――商品は貨幣を恋い慕う――

福　留　久　大

（1）平坦でない真の恋の道
（2）マルクスの引用の誤記
（3）夏の夜の夢の恋の成就
（4）生産物と、商品と貨幣
（5）商品の命を懸けた飛躍

平坦でない真の恋の道

現行『資本論』の第１巻については、著者マルクスが完成稿として刊行し、しかも著者の訂正を経た第二版において編別構成が定まっている。その編別構成で言って、第３章「貨幣または商品流通」第２節「流通手段」A「商品の変態」のなかで、マルクスは、「商品」と「貨幣」を擬人化し、商品の貨幣に対する恋慕あるいは片思いを、こう描写する。〈人々が知るように、商品は貨幣を恋い慕うが、「真の恋の道は決して平坦ではあり得ない」〉。「真の恋の道は決して平坦ではあり得ない」という部分が、シェイクスピア作品に由来している。そして、第１巻において15件ないし16件あるシェイクスピア関連の引用は独逸語に翻訳された上での引用が通例だが、この部分だけは次の如く英文のままで引用されている。

〈Man sieht, die Ware liebt das Geld, aber „the course of true love never does run smooth“.[41]〉（Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Kar Marx Friedrich Engels Werke, Band 23. Dietz Verlag, Berlin, 1962. 18. Auflage 1993. S.122）。

マルクス・エンゲルス著作集（日本での通称は「全集」）第23巻の現行『資本論』第１巻の当該英文には、上記のように［41］の註記番号が付されており、同書巻末に次の註記が添えられている。ここで、はじめて編集者註記の形で、この引用がシェイクスピア『夏の夜の夢』第１幕第１場の台詞に由来することが示される。〈[41] *„the course of true love never does run smooth“*（„der Weg wahrer Liebe ist niemals eben“）―Shakespeare, „Ein Sommernachtstraum“, 1. Aufzug, 1. Szene.〉（*ibid*., S.849）。

「商品は貨幣を恋い慕う」とは、商品が貨幣との交換を切望すること、すなわち商品所有者から見ると商品が売られて貨幣を入手できるよう願っていることを意味するわけで、マルクスによる的確な比喩表現と言える。しかも、その望みが叶うか否か、その願いが実現するかどうか、決定権は、いつでもどこでもどういう商品でも購入できる強い力をもつ貨幣、「直接的一般的交換可能性の形態〈die Form

unmittelbarer allgemeiner Austauschbarkeit〉（*ibid*., S.84）」にある貨幣の手に握られている。逆方向から見ると、商品は実に弱い立場に置かれていることになる。この弱い立場を「真の恋の道は決して平坦ではあり得ない」と、シェイクスピア由来の台詞に繋げて演劇的筆法で強調するマルクスの高度の学識、それに基づく卓抜な表現能力は、瞠目に値する。

ところで、前述の文中に「シェイクスピア作品に由来している」とか「シェイクスピア『夏の夜の夢』第１幕第１場の台詞に由来する」という具合に、「由来している、由来する」と書いたのは、先の『資本論』英文がシェイクスピア『夏の夜の夢』第１幕第１場の台詞そのままではなくて、原文と微妙に食い違っているからである。該当する原文と坪内逍遥による邦訳は次の通りである。

“Lysander: Ay me! for aught that I could ever read,
Could ever hear by tale or history,
The course of true love never did run smooth;”
（A Midsummer-Night’s Dream, Act 1 Scene 1）。

「ライサンダー：嗚呼々々！　書（ほん）を読んでも、
話や歴史で聞いたところでも、
真実（ほんとう）の恋といふものは、決して都合よく行ったことはないらしい。」
（真夏の夜の夢、第１幕第１場）

（『シェークスピア著・坪内逍遥訳『ザ・シェークスピア ── 全戯曲（全原文＋全訳）』第三書館、1989年刊、81頁）。

〈The course of true love never did run smooth.〉とシェイクスピアが過去形で表現している部分が、現行『資本論』では〈the course of true love never does run smooth.〉と現在形の表現に変化している。

シェイクスピア『夏の夜の夢』の該当原文に異文が存在するというような揺らぎがないか、念のために、A MIDSUMMER NIGHT’S DREAM, Edited with Introduction and Notes by SANKI ICHIKAWA and TAKUJI MINE, Tokyo Kenkyusha で点検したが、同書８頁に全く同じ文章が記されていて、異文の存在の懸念は払拭される。

マルクスの引用の誤記

他方、『資本論』の側には、明確な異文の存在が認められる。まず、1867年刊行の『資本論』初版で当該個所を見ると、次のようになっている。

〈Man sieht, die Waare liebt das Geld, aber „the course of true love runs never smooth“.〉（Karl Marx, *Das Kapital.Kritik der politischen Oekonomie*. Erster Band, Verlag von Otto Meissner, Hamburg, 1867. S.67.）。

現行版『資本論』との相違は、一つは「商品」を die Waare と表記していること、次に „the course of true love runs never smooth“ となっていて、現在形である点は共通だが、動詞 runs が先行し副詞 never が後に続く形になっている。現行版で副詞 never と助動詞 does が先行し動詞 run が最後に置か

れているのと、明確に語順が違っている。卒然と英文が記されているだけで、シェイクスピアとその作品について何事も言及のないことも現行版と異なっている点である。そういう現行版と初版との異同を越えて、ここで特筆大書されねばならないことは（内容的には、騒ぎ立てる必要のない全くの些事に過ぎないが）、マルクスのシェイクスピア作品からの引用に際して誤記が生じて仕舞ったことである。

マルクスが大幅な改訂の筆を振るって1872年に刊行した第二版『資本論』では、次の通り、問題の個所には初版に何らの変更も加えられていない。シェイクスピアに関わる註記が無い点でも初版と同じである。したがって、引用の誤記も訂正されないままである。

〈Man sieht, die Waare liebt das Geld, aber „the course of true love runs never smooth“.〉（Karl Marx, *Das Kapital.Kritik der politischen Oekonomie*. Erster Band, Zweite verbesserte Auflage. Verlag von Otto Meissner, Hamburg, 1872. S.86.）。

1872－75年に分冊形式で刊行されたフランス語版『資本論』、翻訳・刊行の過程でマルクスが校正に注意を払ったとされるフランス語版では、当該部分は以下の通りである。初版と再版の独逸語部分をフランス語に移しただけで、英語部分はマルクスが誤記したままに残っている。ただ、初版・再版と（そして後続の三版・四版とも）大きく異なるのは、註記番号が付され同一頁に英文を仏文に翻訳して原典がシェイクスピアであることを示す（作品名は示されていない）脚註が添えられたことである。

〈Comme on le voit, la marchandise aime l’argent, mais «the course of true love runs never smooth[1].»〉

1. “Le véritable amour est toujours cahoté dans sa course”（Shakespeare）.

（*Le Capital*, par Karl Marx. Traduction de M.J.Roy, Entièrement Revisée par L’Auteur. p.45.）

マルクスは1883年３月14日に永遠の眠りについた。3000部刊行された第二版が1881年秋には捌けて第三版を準備中のことだった。エンゲルスが準備を引き継いで、1883年11月７日付で第三版の序文を書き、（タイトル・ページにある刊年1883年を越えて）1884年１月末か２月初めに刊行された。この第三版においても、下記の通り、当該個所には何らの変更も無い。

〈Man sieht, die Waare liebt das Geld, aber „the course of true love runs never smooth“.〉（Karl Marx, *Das Kapital. Kritik der politischen Oekonomie*. Erster Band, Dritte vermehrte Auflage. Verlag von Otto Meissner, Hamburg, 1883. S.78.）。

当該個所に変更が認められるのは、1890年エンゲルスによって校訂された最後の版、第四版『資本論』である。この第四版は、エンゲルスによって本文及び註記を最後的に確定することになったものとして、「第五版以後の各版はたんに第四版を覆刻したものに過ぎない」（『資本論辞典』687頁）と言われている。第四版の閲覧の機会を得られなかったので、第四版『資本論』の覆刻版、『新メガ（新マルクス＝エンゲルス全集）』Ⅱ/10巻『1890年版資本論』〈KARL MARX FRIEDRICH ENGELS GESAMTAUSGABE（MEGA）, Zweite Abteilung Band 10, KARL MARX. *DAS KAPITAL. KRITIK DER POLITISCHEN*

ÖKONOMIE. ERSTER BAND. HAMBURG 1890. Dietz Verlag Berlin 1991〉で該当部分を見ると、〈Man sieht, die Waare liebt das Geld, aber „the course of true love never does run smooth“〉(S.101) となっている。商品を die Waare と表記する点は第三版までと変わりなくて、never does run と副詞・助動詞・動詞の順番に並んだ点が現行版と同じ語順に変わっている。本文に関する限りでは、シェイクスピアに関わる註記が無い点は初版、第二版、第三版と共通している。(但し、MEGA は、本文 Text と参考資料 Apprat の2冊組で構成されていて、Ⅱ/10巻の参考資料部分に編集者による次の註記が添えられている。〈William Shakespeare: A midsummer-night's dream, Act 1, scene 1 „…the course of true lover never did run smooth; …“〉(S.831)。この註記に依って、引用元が『夏の夜の夢』第1幕第1場であることが示される。しかし、シェイクスピアの原文が love としているところをこの註記が lover としているのは編集者の誤記か印刷者の誤植だろう。)

「第五版以後の各版はたんに第四版を覆刻したものに過ぎない」(『資本論辞典』687頁) と言われる後年の版の一例を挙げると、次のような形になっている。

〈Man sieht, die Ware liebt das Geld, aber „the course of true love never does run smooth“. [der Weg wahrer Liebe ist niemals eben]〉(Karl Marx, *Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie*. Erster Band. Herausgegeben von Friedrich Engels. Volksausgabe. Dietz Verlag, Berlin, 1953. S.112)。

「商品」が die Ware と表記されたこと、英文部分が the course of true love never does run smooth と副詞・助動詞・動詞の語順になったこと、この二点は現行版『資本論』と共通する。ただ、シェイクスピアについての言及が無いこと、現行版『資本論』では巻末の註記部分に現れている英文部分の独逸語訳 [der Weg wahrer Liebe ist niemals eben] が本文部分に付記されていること、この二点は現行版『資本論』と相違する。

以上のような経緯をたどって、『資本論』独逸語原書においては、初版においてマルクスが誤記した “the course of true love runs never smooth;” が、語順を変えただけで生き残り、今に至るもシェイクスピア作品の原文 “The course of true love never did run smooth;” は、正確な形では引用されずに終わっているのである。

それに対して、シェイクスピアの母国イギリスにおいて1887年に刊行された英語版『資本論』では、エンゲルスが序文で言っているように、「マルクスの末娘であるイーヴリング夫人が、引用文を点検することと、英国の著者や青書からとってきてマルクスが独逸語に翻訳した多数の章句を原文に復元することとを申し出た。このことは、僅かばかりのやむを得ない例外を除いて、一貫して実行された。(Mrs.Aveling, Marx's youngest daughter, offered to check the quatations and to restore the original text of the numerous passages taken from English authors and Bluebooks and translated by Marx into Germany. This has been done throughout, with but a few unavoidable exceptions.)」。このために、次のような形で、シェイクスピアの原文通りの引用が実現しているのである。ただし、シェイクスピアおよび作品についての言及は、全く見られない。

〈We see then, commodities are in love with money, but “the course of true love never did run smooth.”〉（Karl Marx, *Capital, A Critical Analysis of Capitalist Production*. Vol.1.Translated from the third German Edition, by Samuel Moore and Edward Aveling, and Edited by Frederick Engels. Swan Sonnenschein, Lowrey, & Co., London. 1887. p.80.）

英語版『資本論』において、当該個所に関連して作者シェイクスピアと作品『夏の夜の夢』が明示されるのは、1996年のマルクス・エンゲルス著作集版『資本論』（Karl Marx, *Capital*,Vol.1, Karl Marx Frederick Engels Collected Works, Volume 35. Lawrence & Wishart, London, 1996.）を待たなければならなかった。

坪内逍遥訳では、作品名が『真夏の夜の夢』となっている。岩波文庫版『夏の夜の夢』の訳者・土居光知に拠ると、Midsummer-Night は、Midsummer-Day つまり夏至節（夏至祭）が祝われる６月24日、その前夜に当たる。したがって必ずしも盛夏の夜、真夏の夜とは言えない。 しかも、舞台は夏至祭前夜ではなく、May-Day つまり五月祭の５月１日、その前夜の４月30日にかけて起こった事件を軸に展開している（同書５頁）。ではなぜ Midsummer-Night なのか。「この言葉は、夏至祭での羽目の外しぶりを『夏至祭の狂気（ミッドサマー・マッドネス Midsummer-Madness）』と呼んだことを踏まえて用いられている。つまり、夏至祭の夜のような『しっちゃかめっちゃかな夢』という意味なのだ」というのが、現代のシェイクスピア研究家・河合祥一郎の解釈である（『あらすじで読むシェイクスピア全作品』祥伝社新書、111頁）。そういう事情を踏まえて、小稿では引用の場合を除き、『夏の夜の夢』の表記を使用する。

夏の夜の夢の恋の成就

ライサンダーが、「真実の恋といふものは、決して都合よく行ったことはないらしい」と嘆いた恋の行方はどうなったか、恋の行方を軸に『夏の夜の夢』の概略を追ってみる。

アテネ大公シーシアス（Theseus）とアマゾン女王ヒポリタ（Hippolyta）は、４日の後に挙げられる結婚式を待ち焦がれている。そこへ、老貴族イージアス（Egeus）とその娘ハーミア（Hermia）と、ハーミアと相思相愛のライサンダー（Lysander）と、ハーミアを恋うてその願いが叶えられないディミートリアス（Demetrius）とが登場する。イージアスは、婿にしようと望んでいるディミートリアスを娘が斥けてライサンダーを愛していることを不都合としてシーシアスに訴えて、強制的にディミートリアスと結婚させるか、アテネの法に依って不孝者の娘を死刑の処するか、シーシアスの裁きを求める。シーシアスは、イージアスの意向を尤もとして色々にハーミアを説得するが、ハーミアは「心に染まぬ男に生涯を縛られる辛さを忍ぶくらいなら」死をも厭わぬと言って、肯んじない。シーシアスは、彼女に３日間の猶予を与え、ディミートリアスと結婚するか、それが嫌なら死刑に処されるか、一生尼の生活を過すか、いずれかを選択するように命令する。

この状況の下で、マルクスが引用する台詞が出てくる。

ライサンダー：嗚呼々々！　書（ほん）を読んでも、
　　話や歴史で聞いたところでも、
　　真実（ほんとう）の恋といふものは、決して都合よく行ったことはないらしい。
Lysander: Ay me! for aught that I could ever read,
　　Could ever hear by tale or history,
　　The course of true love never did run smooth;
　　（A Midsummer-Night's Dream, Act 1 Scene 1）。

様々の「恋路の邪魔」を数え挙げるライサンダーに、ハーミアは「真実の恋人たちがいつもそのような憂き目に遭うものなら、それこそ宿命の逃れ得ぬ掟。それなら、お互い苦しむ心に辛抱を教えましょう」と健気に応じる。

ライサンダー：あっぱれな覚悟だ！　そこでだ、ねえ、ハーミア、
　　ぼくに伯母がいるんです。伯父の残した
　　財産をうんと抱えているんですが、子供がない。
　　アテネから７リーグほどのところに邸を構え、
　　ぼくを実の息子のように大事にしてくれている。
　　ねえ、ハーミア、そこでならぼくたち結婚できる。
　　いくらきびしいアテネの法律でも、あそこまでは
　　追いかけられやしない。だから、このぼくを愛してくれるのなら、
　　明日の晩お父さんの家をぬけだしてきてください。
　　そして都から１リーグのあの森、
　　――そら、いつか５月祭に朝早く出かけたとき、
　　あなたとヘレナに会ったことがありますね――
　　あの森で待ち合わせましょう。
ハーミア：まあ、ライサンダー、
　　わたし誓いますわ、キューピットの一番強い弓にかけて、
　　金の矢じりの付いた一番上等な矢にかけて、
　　ヴィーナスの使いの無邪気な鳩にかけて、
　　魂と魂をむすんで、恋を助けてくれる神さまにかけて、

こうして、ライサンダーとハーミアは、アテネから隔たった別天地で真実の恋を成就するはずだった。だが、偶然の悪戯が重なって、波乱の末に、アテネ郊外の森が彼らの恋の実る場となった。第一に、ハーミアの幼馴染の親友ヘレナ（Helena）にだけ駆け落ちの企てを打ち明けたこと。ヘレナはディミートリアスに夢中で、以前は自分と婚約していた彼が、ハーミアに目移りしたのが口惜しくてたま

らない。ディミートリアスの歓心を買うためにハーミアの逃亡を伝えると、果たして彼はハーミアを追って森へ走っていくため、ヘレナもその後を追って森へ入っていく。

第二に、森の妖精の存在。妖精の王オーベロン（Oberon）が、いたずら妖精パック（Puck）に命じて、恋の三色すみれを摘ませる。その花の汁を寝ている者の目に塗れば、目覚めて最初に見た者に恋するという魔法の惚れ薬である。ディミートリアスにつれなく置いてきぼりにされたヘレナを不憫に思ったオーベロンは、ヘレナを邪険にするあの男の目にも塗って来いとパックに花を渡す。パックは、森のなかでアテネ男を探し廻り、間違えて、ハーミアと道に迷って疲れ果て眠り込んだライサンダーの目に塗ってしまう。ライサンダーが目覚めたとき、たまたまそこにいたのはヘレナだった。突然ハーミアの恋人のライサンダーから熱烈に求愛されたヘレナは、馬鹿にされていると思って怒って立ち去り、ライサンダーは、ハーミアを一人残してヘレナのあとを追いかける。アテネ男を取り違えて「不実な男に真心を取り戻させるどころか、かえって真実の恋人を不実に追いやることになってしまった」と気付いたオーベロンは、今度は過たずディミートリアスに魔法をかけるものの、二人の男に口説かれることになったヘレナは、またからかわれていると思い込んで激怒する。そこにハーミアもやってきて、恋泥棒だとヘレナにつかみかかって喧嘩になる。男二人もヘレナを取り合って決闘しようと大騒ぎになる。

第三に、妖精の働きによる決闘の回避、ライサンダーとハーミア、ディミートリアスとヘレナ、四人の元の鞘への仲直り。ライサンダーとディミートリアスの決闘騒ぎ、ハーミアとヘレナの喧嘩沙汰を見て、オーベロンはパックを責め、元通りの仲に戻せと命ずる。パックは、夜霧の立ち籠る暗闇のなかで、二人の声音を使い分けてライサンダーとディミートリアスを引っ張りまわして疲れ果てさせ、二人を眠らせる。やがて別々に登場したヘレナとハーミアも近くに眠る。パックはライサンダーの目に、元の心に戻す薬草の汁を注ぎ、二組の男女が目を覚ましたときには、めでたし、めでたし、に終わるだろうと言って退場する。翌朝、アテネ大公シーシアスとアマゾン女王ヒポリタが、イージアス等を伴って狩猟のために森に入る。そこに眠っている四人を見つけて驚き、角笛を吹いて目覚めさせる。ディミートリアスは、ハーミアへの恋は遠い記憶のような気がし、今は一番最初に愛したヘレナこそが、心底からの愛の対象だと言う。シーシアスは、ライサンダーとハーミアの結婚を承認し、自分たちの分と合わせて、三組の結婚式を挙げるためにアテネに帰るよう命じて退場する。

生産物と、商品と貨幣

人々が知るように、商品は貨幣を恋い慕うが、「真の恋の道は決して平坦ではあり得ない」〈Man sieht, die Ware liebt das Geld, aber „the course of true love runs never smooth“〉。この台詞を論題に取りあげるのだから、この台詞を含む文節が筆者の印象に刻み込まれていることは勿論である。が、それ以上にこの文節に続く次の一節が、マルクスに対する複数の疑問を惹起する点で、筆者には『資本論』のなかでも特別に深い印象を残す文節となっている。次のような四つの文章で構成される文節である。

「分業は、労働生産物を商品に転化させ、そうすることによって、(A) 商品の貨幣への転化を必然に

する。(B) 労働生産物の貨幣への転化を必然にする。分業は、同時にこの化体が成功するか否かを偶然にする。とは言え、ここでは現象を純粋に考察しなければならず、したがってその正常な進行を前提しなければならない。そこでとにかく事が進行して、商品が売れないようなことがないとすれば、商品の形態変換は、常に行われているのである、変則的にはこの形態変換で実体―価値量―が減らされたり加えられたりすることがあるにしても。」

特別に深い印象を残す文節となっている第一の理由は、最初の文章における論理的視点と文法的視点の対立矛盾に存在する。商品経済関係を反映する論理の視点に立脚すれば、(A) 商品の貨幣への転化を必然にする、という語句の流れが適切である。それに対して、マルクスの叙述の文法の視点に即するときには、(B) 労働生産物の貨幣への転化を必然にする、という解釈が妥当性を有する。この (A) (B) 二つの語句の対立矛盾が問題となる。

商品経済の関係においては、生産物の商品への転化、商品の貨幣への転化の必然性という順路が妥当であって、商品を抜きにして生産物の貨幣への転化の必然性という進行は有り得ないのである。何故、有り得ないか。「有り得ない」事情を表面的形式的と内面的実質的との二つの側面から検討する。

まず表面的形式的な事情を挙げる。マルクスは、「売ることを予定されている物品すなわち商品〈ein zum Verkauf bestimmter Artikel, eine Ware〉(Marx, *Das Kapital*, MEW, Band 23. S.201)」という説明を与えている。物品とか財貨とか生産物とか呼ばれるものは、人間社会のあらゆる時と所に遍在していて、人間の生活を支えるために使用されることになる。商品経済的に分業が進んだ社会では、生活の必要を満たす様々の生産物をすべて自分たちで生産することは出来ないので、自分たちの生産物を販売することによって貨幣を入手し、その貨幣で他人の生産物を購入することになる。「自分たちの生産物を販売する」ということは、その時点で生産物は単純な生産物ではなくて「売ることを予定されている物品すなわち商品」に転化していることになる。次いで、「他人の生産物を購入する」というときも、その生産物は単純な生産物ではなくて「売ることを予定されている物品すなわち商品」に転化していなければならない。換言すれば、物品とか財貨とか生産物と呼ばれるものは、自分たちで使用する目的のものと他人に販売する目的のものとの二種類に分けられる。後者が商品である。こうした論理を辿れば、生産物が商品に転化し、次に商品が貨幣に転化するという順路は存在しても、生産物が単純な生産物として直接に貨幣に転化する道筋は有り得ないことは理解できるはずである。

次に多少とも内容に立ち入って内面的実質的な事情を見てみたい。『資本論』第１巻は、「資本の生産過程」と題されている。しかし、資本の生産過程が論じられるのは、第３篇「絶対的剰余価値の生産」に至ってからであって、それに先立って第１篇「商品と貨幣」、第２篇「貨幣の資本への転化」が配置される構成になっている。第１篇「商品と貨幣」は、３章に分かれていて、第１章「商品」で商品自体の分析を基礎にして形態的な面から貨幣発生の必然性を明らかにする。第２章「交換過程」では、商品の現実的な交換過程の分析を通じて、その具体的な面から貨幣発生の必然性を把握することになる。そのうえで、第３章「貨幣または商品流通」において、商品の発展としての貨幣を、また貨

幣自身の諸機能を「価値尺度」「流通手段」「蓄蔵貨幣」「支払手段」「世界貨幣」として解明する。第２篇「貨幣の資本への転化」において、商品の形態が貨幣の形態に発展するだけでなく、必ず資本、それも生産過程を支配する資本の形態に発展するものとして説かれる。

このような『資本論』の論証の展開過程のなかに、第３章「貨幣または商品流通」第２節「流通手段」a「商品の変態」における一文「分業は、労働生産物を商品に転化させ、そうすることによってその貨幣への転化を必然にする」を置いてみると、後半部分が「労働生産物の貨幣への転化の必然性」ではなくて、「商品の貨幣への転化の必然性」を問題としていることが明確になる。「売ることを予定されている物品すなわち商品」にあっては必ず購買手段としての貨幣が無ければならないという必然的契機を有している。一般の生産物には必ずしも貨幣へと発展していく契機を内包しているわけではない。商品が貨幣を恋い慕う切実さが、一般の生産物には欠けているのである。一般の生産物は、必ずしも販売を予定されているわけではなく、したがって貨幣を恋い慕う必要を感じないのである。この節の題を「生産物と、商品と貨幣」というように、「生産物」と「商品と貨幣」を区切った所以である。

しかしながら、この最初の文章を、マルクスの叙述自体に即して読むと、事態は一変する。

「分業は、労働生産物を商品に転化させ、そうすることによってその貨幣への転化を必然にする〈Die Teilung der Arbeit verwandelt das Arbeitsprodukt in Ware und macht dadurch seine Verwandlung in Geld notwendig.〉(Marx.*ibid*., S.122)」。

この一文、文法的に考えると、「その貨幣への転化〈seine Verwandlung in Geld〉」のなかの〈seine〉は、中性名詞〈Arbeitsprodukt〉「労働生産物」を受ける所有形容詞〈sein〉が女性名詞〈Verwandlung〉に対応した格変化で〈seine〉となったものである。

商品経済関係の論理を重視する視点からは、女性名詞〈Ware〉「商品」を受ける所有形容詞〈ihr〉が女性名詞〈Verwandlung〉に対応した格変化で〈ihre〉となったものが用いられることが望ましい。だが、現実には、マルクスは初版以来一貫して〈seine〉を使用している。こうした文法的視点からすれば、「その貨幣への転化」は「労働生産物の貨幣への転化を必然にする」と理解され翻訳されるべきところであって、事実、『資本論』邦訳書では、「労働生産物の貨幣への転化」と翻訳される場合が殆どである。

①高畠素之訳。「分業は労働生産物を商品に転化し、斯くすることに依ってまた、労働生産物の貨幣化を必要ならしめる。」(カール・マルクス著、『資本論』第１巻第１冊、改造社、1927年刊、77頁)。

②向坂逸郎訳。「分業は、労働生産物を商品に転化する。そしてこのことによって労働生産物の貨幣への転化を必然的にする。」(カール・マルクス、『資本論』、岩波文庫第１分冊、1947年刊、205頁)。

③長谷部文雄訳。「分業は、労働生産物を商品に転化させ、かくすることによって、労働生産物の貨幣への転化を必然ならしめる。」(カール・マルクス、『資本論』、青木文庫第１部第１分冊、1952年刊、226頁)。

④岡崎次郎訳。「分業は、労働生産物を商品に転化させ、そうすることによって、労働生産物の貨幣への転化を必然にする。」(カール・マルクス著、『資本論』、国民文庫第１分冊、1972年刊、194頁)。

⑤資本論翻訳委員会訳。「分業は、労働生産物を商品に転化させ、そうすることによって、労働生産

物の貨幣への転化を必然にする。」（カール・マルクス著、社会科学研究所監修、『資本論』第１巻第１分冊、新日本出版社、1982年刊、184頁）。

以上のような状況のなかで、唯一つ、商品経済の特質に基づいた邦訳を、今村仁司・三島憲一・鈴木直・訳『資本論』第一巻（上）筑摩書房、2005年刊、に見出すことができる。同書163頁に、該当個所がこう訳出されている。「分業は労働生産物を商品に変容させ、そうすることで商品の貨幣への変容を必然的にする。」

上記のような翻訳事情を、三種類の『資本論』英訳書について確かめてみる。①〈its further conversion into money〉と②〈its further transformation into money〉においては、「その更なる貨幣への転化」という部分に、「労働生産物の更なる貨幣への転化」を意味していることが読み取れる。③については、〈its conversion into money〉「その貨幣への転化」となっていて、〈its〉が「労働生産物」と「商品」との両方を意味する可能性が残る。しかし、定冠詞付きの〈the product of labour〉が、不定冠詞付きの〈a commodity〉より強く作用して、通例では、「労働生産物の貨幣への転化を必然にする」と訳される可能性が大きいと言えよう。

①〈The division of labour converts the product of labour into a commodity, and thereby makes necessary its further conversion into money.〉

（Karl Marx, *Capital, A Critical Analysis of Capitalist Production*.Vol.1.Translated by Samuel Moore and Edward Aveling, 1887. p.81.）

②〈The division of labour transforms the product of labour into a commodity, and thus makes its further transformation into money essential.〉

（Karl Marx, *Capital*, In two volumes・volume one, Translated by Eden and Cedar Paul. 1928. Everyman's Library. p.85）

③〈The division of labour converts the product of labour into a commodity, and thereby makes necessary its conversion into money.〉

（Karl Marx, *Capital, A Critical Analysis of Capitalist Production*.Vol.1.Translated by Ben Fowkes. 1976. Pelican Books. p.117）

『資本論』訳書の点検の最後に、マルクス自身が校正を行ったフランス語版を見ると、以下の通りである。〈sa transformation en argent〉において、所有形容詞〈sa〉は女性名詞〈transformation〉に対応した女性形であり、所有主体の性別を表示するものではない。それゆえ、一応は、「労働生産物の貨幣への転化」と「商品の貨幣への転化」との両方の解釈の余地が残る。しかし、通例では定冠詞付きの〈le produit du travail〉が、冠詞なしの〈merchandise〉より強く響いて、その下に添えた『フランス語版資本論』の邦訳のように「労働生産物の貨幣への転化を必然的にする」と訳されるのだろう。

〈La division du travail transforme le produit du travail en merchandise, et nécessite par cela même sa

transformation en argent.〉

（*Le Capital*, par Karl Marx. Traduction de M. J. Roy, Entièrement Revisée par L'Auteur. p.45.）

「分業は労働生産物を商品に転化し、そのこと自体によって、労働生産物の貨幣への転化を必然的にする。」（江夏美千穂・上杉聰彦・訳『フランス語版資本論』上巻、法政大学出版局、1979年刊、87頁）。

商品の命を懸けた飛躍

前述の四つの文から成る文節に特別に深い印象を残す第二の理由は、次の二つの文に現れるマルクスの見解への疑問に関わる。「とは言え、ここでは現象を純粋に考察しなければならず、したがってその正常な進行を前提しなければならない。そこでとにかく事が進行して、商品が売れないようなことがないとすれば、商品の形態変換は、常に行われているのである、――」。

ここでマルクスは、「商品が売れないようなことがない」と言い、「商品の形態変換は常に行われている」と言う。しかもそれが「正常な進行」だと強調する。

だが、この見解は、彼が掲げたシェイクスピア由来の台詞「商品は貨幣を恋い慕うが、『真の恋の道は決して平坦ではあり得ない』」に明らかに反するものである。この台詞には、「人々が知るように・誰もが知るように〈Man sieht〉」と記されるが、正にその通り、商品の貨幣への転化、つまり商品の販売は困難に満ちているのである。この困難性を無視したことが、マルクスの議論に幾つかの弱点をもたらすことになっているが、ここではその問題は措くことにする。いまは、正に逆にマルクスが商品の販売の困難性を徹底的に強調したことを指摘して、シェイクスピア由来の台詞の背景的事情を明らかにすることに努める。

「人々が知るように、商品は貨幣を恋い慕うが、『真の恋の道は決して平坦ではあり得ない。』」この一文に少し先だって、商品の売れない可能性、商品の弱い立場について、マルクスは、こう述べる。「W－G（Ware ＝商品、Geld ＝貨幣）。商品の第一変態または販売。商品体からの金体への商品価値の飛び移りは、私が別のところで言ったように商品の命懸けの飛躍（Salto mortale）である。この飛躍に失敗すれば、商品にとっては痛くはないが、商品所有者にとっては確かに痛い」（S.120）。飛躍の失敗の可能性が三分類されて、例示される。

第一に、需要側との不適合の事例。「彼の生産物はただ貨幣においてのみ一般的な社会的に認められた等価形態を受け取るのであり、しかもその貨幣は他人のポケットのなかにある。それを引き出すためには、商品は何よりもまず貨幣所有者にとって使用価値でなければならず、したがって商品に支出された労働は社会的に有用な形態で支出されていなければならない。換言すれば、その労働は社会的労働の一環として実証されなければならない。しかし、分業は一つの自然発生的な生産有機体であって、その繊維は商品生産者たちの背後で織られたものであり、また絶えず織られているのである」（S.120-121）。こういう事情ゆえに、需要との適合の保証はなく、売れない可能性が不断に存在するのである。

第二に、供給側での類似の商品との競争の事例。「生産物は今日は或る一つの社会的欲求を満足させ

る。明日はおそらくその全部または一部が類似の種類の生産物によってその地位から追われるであろう」(S.121)。

第三に、供給側での同種類の商品との競争の事例。「労働が、われわれの織職のそれのように社会的分業の公認された一環であっても、それだけでは彼の20エレのリンネルそのものの使用価値は決して保証されてはいない。リンネルに対する社会的欲求には、すべての他の社会的欲求と同じように、その限度があるが、それがすでに競争相手のリンネル織職たちによって満たされているならば、われわれの友人の生産物は余計になり、したがって無用になる。貰い物ならば、いいも悪いもないのだが、彼は贈物をするために市場を歩くのではない」(S.121)。

商品は、交換されなければ価値を実現できないだけでなく、使用価値としても役立ち得ないのであって、全く意味のないものにならざるを得ない。商品の売れない可能性、商品の弱い立場を如何に克服し得るか、そこに商品所有者の絶えざる課題を見ることができる。シェイクスピアの台詞を引用したマルクスの表現は、そのような課題へ接近する糸口に成り得るものである。

〔九州大学名誉教授〕